

# 一輪の朝顔のごとく — 千利休 もてなしの極意 —

(株)日本設備工業新聞社  
代表取締役社長 高倉克也

戦国時代を制した織田信長と出会って千利休(1522-1591)の運命は一変する。貿易で栄えた商業都市・堺を手中にした信長は商人のたしなみで接客や親睦や商談の場でもあった茶の湯に入れ込み、商人の利休を指南役に抜擢する。茶の湯は権力の象徴となり、利休が目利きした茶器は一國一城に匹敵するほどの威厳を放つようになった。

本能寺の変で非業の死を遂げた信長に代わって天下の覇者となった豊臣秀吉も御茶湯御政道と称して信長以上に利休を重用した。秀吉の側近中の側近として比類のない茶の道を極めてゆく利休に各地の大名たちはこぞ弟子入りする。

しかし名声が高まり、茶聖と畏怖され、世間への影響力が強まるほど秀吉との溝は深まっていった。やがて永遠に袂を分かたず日が訪れる。

## 自治都市の納屋衆として

利休は現在の大阪府堺市で納屋衆と呼ばれていた裕福な商家の跡取り息子として生まれた。商人としての品位や教養を身につけるために16歳で茶の湯の道に入り、18歳で高名な武野紹鷗の弟子となる。家業に励む傍ら茶人としての修養を積み、本名の与四郎を改め宗易と名乗った。

当時の堺は周囲を濠で囲み、浪人たちを雇って警護させるなど商人が自由に商売できる南蛮貿易都市として栄えていた。港で倉庫業を営む納屋衆らが有力者として自治に携わり、戦国武将の多くは堺で国内外の武器を調達していた。

天下統一に燃える信長は圧倒的な武力を背景に堺を直轄地として掌握する。最大の収穫は茶の湯だった。信長によって茶の湯は商人の風流な文化から統治権力のシンボルへ転化していく。

まず商人から茶道具の逸品を続々と買い上げ、家臣の武功の褒美として高価な茶碗を与えるようになった。堺の有力な商人で名の通った茶人でもある今井宗久、津田宗及、そして利休を師匠格の茶頭に登用し、信長が認めた家臣にのみ茶会を開くことを許した。家臣らは最高の榮譽として信長から茶会の許しを得ることに躍起となる。

前途洋々と思われた信長の生涯も予期せぬ謀反によって断ち切られた。1582年6月2日、信長は秀吉の毛利攻めに加勢するために京都の本能寺に到着した。昼間は茶会を開き、夜半になって明智光秀の軍勢に襲われる。みずから槍をとって反撃したものの、少数の側近しか従えておらず、最後は火を放って自刃した。

訃報を知らされた秀吉はすぐさま毛利と和議を結んで中国地方から駆け戻り、明智軍を撃破して一気に信長の後継者に躍り出る。秀吉の台頭によ



長谷川等伯による利休像

って60歳になった利休も新たな転機を迎えた。

## 心得を形にした茶室

茶の湯の政治利用を継承した秀吉は利休ひとりを茶頭に任命し、500石を与えた信長の6倍の3000石で召しかかえた。秀吉が京都の居城として聚楽第を構えると利休も近辺に移り住む。

1585年、利休は秀吉が関白就任の返礼で正親町天皇に茶を点てた禁中茶会を取り仕切り、天下一の茶人として全国に知れわたる。町人の身分では宮中に参内できないことから、宗易を改め利休の居士号を勅賜された。キリシタン大名として知られる大友宗麟は大阪城を訪れたとき、秀吉の弟の秀長から「内々のことは利休に、公のことは私に」と耳打ちされた。

大名からも崇められる要人となった利休は千家流茶道の開祖として茶の湯の真髄を極めていく。禅の教えに基づいて茶道の心得を貴賤平等・主客同一・和敬清寂・一期一会などの言葉で表現した。

茶室の中では主人も客人も対等で身分は関係ない。利休が考案した二畳敷きの茶室の待庵は躡り口から入る。間口が狭いうえに低い位置にあり、いったん頭を下げて這うような格好にならないと入れない。大名であろうと刀を外さないと決してくぐるができない。利休は茶の湯に臨む謙虚な姿勢を文字どおり形にした。太閤検地や刀狩りを通じて身分制度を確立した秀吉も一時は利休の思想に同調していた。

1587年、秀吉は九州征伐の祝勝会をかねて史上最大の茶会となる北野大茶湯を京都の北野天満宮で催した。利休を総合的な演出役として公家や武士だけでなく百姓や町人の参加も許され、拜殿には秀吉秘蔵の茶道具が公開された。会場に設けられた茶席は80カ所以上となり、秀吉は上機嫌で茶を点て人々にふるまった。

北野大茶湯をピークに秀吉と利休の蜜月関係は急速に冷えていった。秀吉は南蛮貿易の利権を独占しようと堺に重税を科し、独立の象徴だった濠を埋めてしまう。堺の伝統と商人たちを守ろうとする利休との確執が表面化する。秀吉への態度がふとどきだとして愛弟子の山上宗二が処刑されたことでふたりの対立は決定的なものになった。

## 一期一会で伝えるもの

1591年、派手好みの秀吉が黒を嫌うことを知りながら利休は茶会で黒楽茶碗を使った。家臣たちの前で秀吉の面子は潰される。利休は暗黙のうちに「世のなかに茶を飲む人は多けれど、茶の道を知らぬは茶にぞ飲まるる」と論じていた。

怒った秀吉から京都を出て堺で謹慎するように命じられる。利休が参禅している大徳寺の山門の修復費を寄進した際、お礼として門の上に木造の利休像が据えられたことが罪に問われた。秀吉も訪れるのに上から見下ろすのは無礼きまわりないという理由だった。

重鎮の家臣の前田利家は利休に使者を送り、詫びを入れれば許されると助言した。しかし利休はすぐさま断った。常々「頭を下げて守れるものもあれば、頭を下げるゆえに守れないものもある」と語っていた利休に安易な妥協はありえなかった。

京都を離れるとき多くの門弟たちは秀吉を恐れ、高弟の古田織部と細川三斎だけが淀の船着き場で見送った。利休が謝罪しないことで秀吉の怒りは頂点に達し、利休像が山門から引き摺り下ろされ、一条戻橋のたもとで磔にされる。それでも秀吉の気は治まらず、ついに切腹を命じた。

弟子の大名たちが利休を逃がすおそれがあるとして秀吉の命令を受けた上杉景勝の軍勢が屋敷を取り囲んだ。雷鳴が轟き、霰の降る荒天のもと利休は使者に最後の茶を点て70年の生涯を閉じる。首は磔にされた木像の下に晒された。町人の切腹は前代未聞で利休が最初で最後だった。

利休の死から7年後、秀吉も病床に臥して他界する。晩年は酷い仕打ちを後悔していたという。

生涯をかけて利休が追究した侘び茶は正直に、慎み深く、おごらぬさまを真髄としていた。黄金の茶室をつくらせた秀吉の対極で利休はいっさいの虚飾を剥ぎとった内面の美を茶の湯で伝えようとした。枯淡の境地による一期一会のもてなしの極意を物語る逸話が残されている。

ある初夏の朝、秀吉は利休の家に咲き誇る見事な朝顔の評判を聴きつけて見物に訪れた。しかし庭の朝顔はことごとく摘み取られていた。ひどく落胆して茶室に入ると、秀吉のために生けた一輪の朝顔が利休と共に待っていた。